

首を切るのは誰だ

三好十郎

場所

或る地方の県庁内、会議室。

時代

現代。

人物

小学校教員……	鈴	木	(二十八才)
小学校校長……	恩	田	(六十才)
郡視学……	高	橋	(五十才)
県視学……	小	野	(五十才)
学務主任……	小	川	(三十八才)
内務部長……	清	水	(四十才)
県知事……	本	田	(五十才)
小学校生徒……	山田耕一		(十八才)
その父……	山田耕兵衛		(四十五才)

(幕が開いて暫くしてから、校長と、それに続いて郡視学が入って来る。二人とも非常に古いフロックコートを着ている。校長は入って来るなり観客席に向ってお辞儀をする。郡視学もそれに釣りこまれてお辞儀をする)

郡視学 や、恩田さん。

校長 ……？

郡視学 あんた、どうしてお辞儀をなさる？

校長 え？ お辞儀？

郡視学 ボンヤリなすっちゃいけませんよ。見なさい、誰もいません。(観客席を指す) 誰もいないのにペコペコするのはどういうもんですかな？

校長 あ、いや、左様々々。誰もいない。ハハハハ。つい癖でな。ハハハ。それに、此処へやって来たのも大分もう以前の事でした。なるほど、相変わらず此処は立派ですなあ。実にな、ハハハハハ。

郡視学 これ、何を笑うんです？ 恩田さん、何をそんなに笑っています？ え？

校長 いや失礼々々。どうもな、ハハハ。

郡視学 笑い事じゃありませんぞ！ しっかりなさい。そんな段じゃありません。いいか、私共はこれで、普通の用事で此処へ来たんじゃない。本県教育界の大事業のために来てい

るんですぞ。ボンヤリしてはなりまっせん。

校長 (急にしよげる) 左様々々。私もその事では心痛していましてな。……どうもこれ、事に依れば……

郡視学 そうですね。辞職しなきゃならないかもわかりません。……あんただけなら、あんただけで済めば、もともと、これはあなたの責任なんですから、まあ仕方が無いが……

校長 私だけで済めば？ ……私だけが辞職すれば、とおっしゃるのかな？ 視学さん、それはあんまり、あなた……

郡視学 ひどいと言われるんですかね？ ……しかし仕方が無い。あんな悪性しやうの生徒を出したのは、あなたの責任だからな。

校長 それは、それは知っています。知っていますがな、そのために此の私が、責任を負うと言っても、私が責任を負わなきゃならんとなれば、あなただって……

郡視学 ええ、負わなければならん事なら負います。だがじゃ、私は郡内の学校を監督している役目です。あなたは、あなたの学校の生徒を監督しているもんですぞ。

校長 そんな事を申されても、私の学校には生徒が八百人からあります。その一人々々の責任を負っていた日にゃ、首がいくつあっても足りはしませんわい。……私はこれでも、なるほど正則の師範出じゃありませんがな、教育事業には既に四十年の経験があるもんです。それが、これ位の事で……、

郡視学 そんな事は此の場合何にもなりはしまつせん。

(間)

校長 ……あんたはそんな事を申されますが……私の身にもなって下さい。……私には子供が

七人もいる。……長男の病気は益々悪い……あとは皆女ばかりで……これまでだって月に百円では苦しかった……それがあんた……。他に仕事と言っても此の年ではなあ……。

郡視学 ……それは私だって同じですよ。子供は三人しきや居ませんがな、みんな極道ばかりで。

次男などは東京に出ていますがな、これが半月にあげず金を送れた。そんな金があると思えますか？

校長 失礼じゃが、視学さんのお貰いなさるものは？

郡視学 あんたとおつかつですよ。……金を送らぬと、泥坊でも放火でも何でもするからと言って強迫して来おる、私はもう……。 (急に声を大きくして) だから、だからですな、今日 はしっかりしていなきやいけまつせんぞ。いいか。

校長 左様々々。

郡視学 しかし、どうして又こんな厄介なことが、選りに選ってあんたの学校に起ったんですかねえ？

校長 それがな、私もふだんから注意はしていたんだが、……が、なんしろ世間があつた調子で御座ろう。あちらでも争議、こちらでも争議とな。生徒も自然気が荒くなります。それで、あんな……。

郡視学 それを正しく導くのが、あんなの役目じゃありませんか。

校長 それがあんな、なかなかそんな工合に。

郡視学 それがいけませんよ。

校長 と申したところで、どうすればいいのですかな。

郡視学 それ、そんなあなたの調子だから、今度の様な事が起ります。どうしても、あなたの責任ですぞ。一体言えば、もっと早くあなたが自決して呉れなきゃならん事だつたんで……

校長 そ、そんな事を言えば、あなた、視学さんだって自決してなきゃならん。

郡視学 馬鹿を言つてはいけませんよ。あなたの責任だ、何を何と言つても……。

校長 あんたの責任だ。

郡視学 あんたの責任だ。あんなの……

(県視学入つて来る。和服。コチコチした袴をはいている)

県視学 あ、高橋さんに恩田さん。どうなすつた？

郡視学 や、これは小野さんですか。昨日はいろいろ。

校長 お世話になりました。どうも。

県視学 何を言い争っています？ 大きな声を出して、どうなすった？

郡視学 いや、別に何でもありません。ホンのチョイとした……

県視学 それにしても、場所柄をお考えにならなきゃ。隣の室まで筒抜けですよ。

校長 実は今度の事で、こんな事が起ったのは私の責任だと、それはもう私の責任なことは知っています。高橋さんがあんまり……

郡視学 だってそうではありませんかな。違っていたら小野さんに訊ねて見なさるがよろしい。

県視学 それは恩田さん、あなたが悪い。あなたの責任です。

校長 そ、そ、そんな事を申されても。私は此の年になるまでこんな、あなた。……じゃあなた方は私一人が辞職をすればよいと思っていられるかな？

県視学 いや、それほど……。まあ、しかし……。

校長 いいや、そうでしょう！ あんた方は此の年になった私を、私を……。私に詰腹を切らせようとしていられるのじゃ。よろしい！ そうなれば、あんた方だって責任が無いとは言わせませんぞ。よろしか。あんた方だって……。

県視学 だからさ、私共が皆そんな事にならぬ様に善後策を講じようとしているんじゃないか。あなたも苦しいに違い無い。高橋さんも苦しい。私にしたってこんな苦しい立場

になった事は、これが初めてですからな。

校長 私だって初めてです。こんな年になって。あなたは私が悪いと申されますが、私がどんな悪い事をいたしました？ いつ悪い事をいたし申した？

郡視学 校長さん、もう……

校長 いいや、それを伺わなければ承知出来ません。私は今の学校からは、拜命以来これで二万人以上の卒業生を出していますぞ。……その私が辞職しなければならぬならば、あなた方だってしなきゃならん。あなた方だって。それから、学務主任さんだって、それから知事さんだって、それから、なんだ、文部大臣だって、それからその……。

(その言葉の終らぬ内に学務主任と内部部長が入って来る。県視学と郡視学と、それから今迄喋っていた校長までが、眼が醒めた様に、ペコペコと何度も頭を下げる)

部長 ……やあ、文部大臣がどうかしましたか？

校長 いえ、その、はい、何でもありません。ほんの話で……はい。(又頭を下げる)

主任 小野さん、もう時間ですから。知事がいらっしやいます。静にして下さい。もう報告書は差上げてありますから皆さんも、余りくどい事は申されんように。恩田さん、例の生徒は？

校長 はい、はい、連れて参りました。控室の方に、受持教師と当人の父もいます。はい。此処へ連れて参りますでしょうか？

主任 そうして下さい。（校長ヨロヨロして出て行く）

部長 あの方は、少しどうかしてはいませんか？

主任 ええ、この間からのゴタゴタで、あがっています。それに年が年ですから。

県視学 はい、先程から大分昂奮して、自分の責任じゃ無いとか何とか言いました。

部長 じゃ誰の責任だと言うんだね？

県視学 それがあなた、話になりませんで。

郡視学 全くのところ。はい。

（校長、小学教員詰（襟服）、山田耕兵衛（コチコチの和服袴無し）、山田耕一（和服。汚れた袴）が入って来る。耕兵衛は愚直そうな百姓丸出しで、入って来るなり何度も何度もお辞儀をする。教員は不動の姿勢で敬礼。耕一は汚い帽子を手でいじくりながら、ヒョイト頭を下げる。身体は法外に大きい、智力の発達が少しおくれているらしく、しよげ、オドオドしながらも、ポカンとしている。耕一の動作と言葉は、初め鈍重でオドオドして、後になるに従ってハッキリ元気よくなる）

主任　これだね。

校長　はい、こちらが受持教師で、こちらが父親でございます。

部長　じゃ皆、そこへ席に着いて呉れ。君、直ぐに知事にそう言って来て呉れないか。

主任　は、では。(出て行こうとしながら扉から顔を出しただけで、あわてて) 知事が一人でやっておいでになります。(皆がシンとなって不動の姿勢になる。知事入って来る。非常な神経質らしく、猫背で絶えず手をブルブルさせる)

知事　みんな揃ったかね？

主任　はい、揃いました。これが校長で、これが県視学で、これが郡視学で、これが受持教師で、これが本人で、これが父親であります。(指された者は順々に頭を下げてビクビクしている)

知事　よろしい。……とにかく怪しからん話だ。どうも怪しからん話だ。わが輩は、加藤内閣以来度々知事をやってるが、今度の様な不祥事件に会ったのはこれが初めてだ。慨歎に耐えん。どうも、……どうかね？(皆が黙って頭を下げる)で、皆、どうしてそんなに突立っている？　え？　どうしたんじゃ？　坐らんか！

部長　さ、席に着いて、席に着いて、早く席に着いて！(あわてて皆が着席する)

知事　(県視学に)　こら！　其処はわが輩の席じゃ！　わが輩の……(県視学飛び上る)　そん

な軽率じゃから、こんな事にもなる！ どうも怪しからん！（着席）

（知事と部長と主任は、見物から向って右の席に並んで着席。郡視学と教員と耕一と耕兵衛は左の席に並んで着席。校長と県視学は席がなくてウロウロしている）

知事　　こら、君達は何をウロウロしている！　早く席に着かんか！　あん！

県視学
校長　　は、はい。

知事　　着けと言ったら着かんか！

（二人が益々ウロウロする）

県視学
校長　　は、はい。

（その拍子に校長が足をすべらして転ぶ。それに蹴つまずいて県視学も転ぶ）

知事 こらっ！

部長 こらっ！

主任 どうしたんだ！

耕一 (天井を向いて) ハッハッハッハッハッ！

教員 山田！ 何を笑っている！

耕一 ハッハッハッハッ！

知事 (立上って大きく) こらあっ！ この馬鹿者奴！ (耕一が笑い止んでキョトンとして知事を見る) 此処を何処だと心得ておるか！

あん！ 恐れ多くも……どうも怪しからん。以ての外だ。

主任 小野さんに恩田さん、早く着席して。

校長 はい、どこに着席したらよろしいので。

主任 しっかりなさい。(指して) 其処だ。

県視学 此処にはもう椅子がありません、せんで。

主任 そうか。ああ。その生徒、その生徒と生徒の父兄は退いた。あそこへ(中央の壇を指して)立っている！

耕兵衛 はい、私ですが？

校長 早く彼処へ行くんじゃない。どうも気が利かんで困る。

同時

耕兵衛　へい、こうれ、耕！　此方へ来るんじや。

（二人が中央の壇の所へ行く。耕一は壇上に正面を向いて立ち、耕兵衛は壇の下に立つ。
県視学と校長も着席）

部長　（傍白）これだから田舎はいやだよ。早く内閣が変ればいいんだ。

知事　なに？

部長　いや、何でもありません。

主任　では閣下、始めましょうか？

知事　始める？　勿論、早くするんだ！　報告は見た。早くするんだ。

主任　山田耕一、そうだったな？

校長　はい、左様で。山田耕一で。

主任　これが、先日来の小作争議の事に就て、学校の生徒を集めて……

校長　はい、左様で。

主任　煽動演説をしたと言うが、それが、その内容がだな。

校長　はい、左様で。

主任　そう一々返事をしなくてもよい。

校長 はい、左様……

郡視学 これ恩田さん！

主任 その内容が不敬にわたる点があったと言う報告が来ているが、これは警察の報告じゃから勿論間違っただけじゃない

郡視学 それも、その、全くの所、まだ考えの決っていない子供の事として、一時の感情に駆られてまして、つい……

主任 君に訊ねているのじゃ無い！ 事はいやしくも。

部長 小野君、もっと手取早くして呉れないかな、要するに善後策さえきまればいいんだから、君（教員を指して）受持だったね？

教員 はい、本県准訓導、鈴木和わい一と申します。奉職以来五年に相成ります。はあ。

部長 どうなんだね、その生徒はふだんから。

教員 山田は本校高等小学二学年生であります、学課成績は常に不良であります。幾分低能かと思えます。

耕兵衛 それはあなた、四つの方に軽い脳膜炎で……。

校長 こうれ、黙っているんじゃない。

主任 ふだんから不穏な言動があるかね？

校長 いいえ、左様なことは絶対にありません。そもそも私の学校の生徒は、教育勅語の御旨みむね

に依りまして、親に孝、君に忠……

主任 黙っていたまい！（耕一に）どうだ、学校は面白いか？

耕一 へ？

主任 学問をするのは面白いか？

耕一 ……へえ。

主任 勉強をするのは好きかね？

耕一 （モジモジして）……い、い、ね。

校長 なに？

主任 よろしい。それで何か、あの日にお前が演説した事は、本気で喋ったのかね？ どうだ？

本気で言ったのか？

耕兵衛 それは私が申しますだ。この子は元から時々突拍も無い事を喋る癖がありました、はい、

あの時にも……

主任 お前は黙っている！（耕一に）何とか返事をしなければわからん。な！

耕一 ……へえ。

教員 山田、返事を申し上げるんだ。

耕一 ……。

主任 自分で本当にそう思って言ったのか？ それとも誰からか言えと言われて喋ったのか？

どっちだ？

耕一 誰も何とも言やしねえだよ。

校長 これ、もう少し言葉使いを丁寧に！

知事 みんな口出しをしちやいかん！

主任 ではな、あの時に言った事を、此処でもう一度言ってごらん。

耕一 忘れました。……忘れただ。

主任 忘れた？ そんな事はあるまい。叱りはしないから言ってごらん。な。

耕一 忘れただ。(教員の顔と校長の顔を見る)

知事 もうよい！ もう耐らん！ 我慢が出来ない、わが輩は。報告が事実なれば、それでよろしい。(益タイライラする) 処決するまでだ！ 此問題は既に新聞までが書き立てて居る。おまけに昨今の模様だ。いつなんどき政変が来るかもわからん。昨日も一昨日もおととい入電があつた位じゃ。選りに選つてこんな時に、こんな馬鹿げた事件が起るなんて！ 早く何とか責任の在所ありかを決定して策を立てなければ、わが輩の立場までがいけなくなる。首を切るんだ！ 首を切るんだ！

教員 山田！ 早く返事を申し上げろ！ 山田聞えないのか？

耕一 はい、はい。

校長 一体、これで、世の中の調子が狂ってい「ると」申しますで。自然学校の生徒にしました

ところでな。小作争議なんて言うもんは、これで、十年前までは無かった事です。それで……

知事 (部長に) 争議はまだ続いているのかね。

部長 はあ。次第に悪化するばかりで。

知事 一体何がどうしたと言うんだ？

部長 稲作が悪いせいもあります。それに。

耕一 そうだ。今年は稲作が悪いだ。それなのに……

耕兵衛 こうれ、こうれ、何を言う！

主任 言わして置け。何だね？

耕一 俺はよく知りません。忘れただ。

主任 又忘れたと言う。……でお前は小作料が上ったのがいけないと言うのかね？

耕一 へ………

主任 いけないと言うのかね？

耕一 いけないも何もありません。……ど、だ、い、なぜ人の作った米を取るだ？

校長 これ、こうれ、山田！

知事 黙っとれえっ！

校長 は、は、はい。

主任 人の作った米を取ると言うど？

耕一 そうではねえか。人の作った米を取るのには泥坊だよ。泥坊しちゃいけねえって（指して）先生も教えますだから泥坊は悪いです。俺は、はあ、泥坊は悪いと言ったまでだ。……それを先生は叱るんだもん。それで……それで……それで俺は学校は嫌えだと言ったんだ。それを、来い来いと言って……

主任 しかし、お前は泥坊だと言うが、まあ米は誰のでも、その米を作る田地は、地主のだよ。地主のものだよ。

耕一 ……そんな事俺は知りま、つ、せん。

主任 知らないと言ったって、たとえばだ。お前のお父さんの田地は、地主さんから借りたもんだ。で、その借賃は出さないでもいいのかね？

耕一 そんな事知りま、つ、せん。……俺のお父つあんの田地が、なぜ地主さんのもんです？ 田を拵えているのはお父つあんだ。俺も、はあ加勢しています。

主任 しかし地主のものは地主のものだ。

耕一 そんな事は俺わかりま、つ、せん。

県視学 どうも、こんな馬鹿ですからなあ。どうも。

郡視学 それで、地主の味方をする者は、みんな悪者だと言ったそうだな！

耕一 言いました。泥坊の味方だから悪者だ。田を作っている俺のお父つあんは、こんな汚え

なりをしているのに、地主さんは働きもしねえのに立派な風しているだ。……悪者の味方はみんな悪者であります。学校でそう教わっただ。

主任 (教員に) そうかね、君。

教員 はい、いいえ。……はい、そう教えました。しかし地主がそうだとは言いません。唯単に……抽象的にその……。

耕一 そう教わっただ。……そう教わっただ。二宮金次郎はよく働いたから、偉い。……そう教わっただ。あんた方は俺一人をこんなにいじめているけど、何をして働いています。お父つあんなどはこんなに汚い着物着ているけど、あんた方は洋服着ているだ。そんなに立派な洋服着ているだ。……それでも飯食わねえでは生きて居れねえだ。……生きて居れねえだ。……その米を作っているのは誰だ？ ……それで俺は……

知事 もうよい！ もうよい！

耕一 田地は地主さんのもんだと決めたのは、誰ですか？ 俺は知らねえ。……誰も教えて呉れねえだ。……誰が決めただ。……

知事 もういい！ 黙れ！ わかった！ 首を切るんだ！ 首を切るんだ！ 切るんだ！

(此の頃、扉から一人の役人が手に電報を持って入って来て部長に渡して出て行く。部長はそれを開いて見て動揺の色)

耕一 首を切ると言ったって、俺の首けえ？

知事 馬鹿！ 君か、此奴こやつの受持教師は？

教員 はい、そうであります。しかし私は、此の様な不祥事件が起きましたに就ては……。勿論責任を負わなければなりません。それは……

知事 黙っている！ 校長、君は早速此の男を退職させて呉れ！ 怪しからん！ いいや！ 退職だ！ 当然の引責退職だ！

校長 は、はい、承知仕りました。鈴木さん、御聞きの通りでござす。明日から出るには及び……

教員 そ、そんな事を、僕は、私は何もそんな……

主任 此処でそんな事を言っても駄目です。

教員 ……それは残酷です。今日からそんな事になれば私は一体どうなります。どうなります？ ……私にはもう働きも何も出来ない母と父がいます。それが……（再び第二の電報を持って役人が入って来て、部長に渡す。部長益々狼狽の色）お願いです、退職にしないで、せめて転任にでもさせて下さい。お願いです。……駄目か、駄目ですか！ 山田、これと言うのもお前のためだぞ。

耕一 そんな事、知らねえだ。俺だって首を切られてもいいだよ。

耕兵衛 こうれ！

知事 それに、報告に依ると、他にも、もっとひどい不敬の言葉を吐いている。しかも煽動された奴等が村役場を襲ったと言うが。……どうも怪しからん。まだまだ手ぬるい。……そもそもわが国体は……

部長 閣下、これをチヨイト御覧下さい。

(電報を差出す)

知事 そんなものは後だ。後にして呉れ。そもそも大日本帝国は……

部長 しかし、これは……

知事 後だと言ったら聞えないのか！

教員 ……(耕一をジツと見上げて、呟く様に) 本当だ！ お前の言う事は本当だ。お前の言った事は本当だ。

主任 何だって？

教員 いや、本当です。悪いのは地主だ！ いや、何もかにもだ。みんな悪いんだ！ ……ねえ、私は月給は五十円です。五十円で一週に三十八時間だ。校長は百円だ。そしてホンのチヨイト修身を教えるばかりだ。視学さんは百三十円で何もしていない。課長さんは百

七十円で、何もしない。知事さんは……。山田、お前の言った事は真理だ！ マルクスは……。

県視学 これ！ 君は気でも狂ったのか！ 此処を何と心得て……

教員 見るがいい！ 下積みになっているものが、みんな搾り取られているんだ！ 本当だ！

畜生！ ロシヤでは……。

知事 何を言っているか！ 怪しからん！ 首だ！ 校長、こんな不埒な教師を使って置くか

らこんな事になるんだ！ 君の責任だぞ！

校長 は、は、はい。私の不行届きで。誠に……。

知事 不行届きと思ったら、辞職するがよい。辞職だ！

校長 はい、あの、私が？ そんな事を申されましても……。

知事 主任、校長の辞表を作製してくれ！ いいか！

主任 はあ。

校長 そんな事を申されましても、はい、私はこれで、四十年も教育事業に……

知事 駄目だ。百年いたろうが二百年いたろうが、此の際だ。仕方が無い！

校長 ……そうでごすか。……私もはや此の年で……。七人の子がどうなり申す？ ……私は、

私は、私は……。泣く

県視学 閣下、どうかもう少し御考慮下さる訳には。此の頃、以前の役人が入って来て部長に耳

打ちをする。部長はサッと顔色を変えて共に出て行く。実は恩田さんは此の県に於ける最年長の勤続者でありまして、……

知事　　いかん！　いかん！　いかん！

県視学　閣下が御赴任なさる三十五年以前からの名校長でありまして……

知事　　なに！　失敬な！　そんな事をツベコベ言うなら君もだ！　首だ！　首だ！

県視学　しかし私までも、何も……

知事　　そうは言わさない！　君は視学だ！　責任がある。既に文部省にまで報告が行っている

とすれば、事は重大だ。辞職して貰う！　主任！

主任　　はあ、早速手続きはいたします。

県視学　しかし私に責任があれば、郡視学にもあります。

郡視学　そんな、あんた、何も抱き込まなくても。

知事　　そうだ、郡視学も辞めて貰う。よろしいか。

教員　　本当だ！　ハハハ本当だ！　山田、君の言った事は本当だぞ！

耕一　　ああ、先生から褒められた！

耕兵衛　こうれ！　黙っとれ、耕！

郡視学　閣下は私ども一家を殺そうとなさるのですか。私は今日まで此の県の教育に関しまして

は……

知事 黙れ！ 今更そんな事を言っても駄目だ。

郡視学 では私を殺そうとなさるのです。殺そうとなさるのです。人殺しだ……

耕一 人殺しだ。

教員 本当だ。本当だ。山田の言う事は本当だ！

郡視学 (小さく) 本当だ！ 本当だ！

県視学 (ウツカリして) 本当だ！ 本当だ！

知事 なに！ 貴様達は全部それでは不忠不良の臣民だ！ 首になるのは当然だ。無頼の徒

だ！ 不忠の臣民だ！ もうよい出て行け！ 出て行け！

教員 主任さん、あなただって、こうなれば。ジツとしては居られますまい。

主任 なに！

教員 そうじゃありませんか。あなたは学務主任ですよ。

主任 閣下、私も一応辞表を出すべきでしょうか？

知事 そうだね、まあ大概大丈夫だろうが、一応出しといて呉れたまい。これだけ首を切れば、

文部省にも内務省にもまあ面目だけは立とう。さあ、皆出て行って呉れ。

耕一 ハッハッハッハッ。

知事 何を笑つとる！ この低能奴！ 貴様のためだぞ！ こんな事になったのは。わが輩の

立場までが危くなつたんだぞ。(青くなつた内務部長が、走る様にして入って来て、知事

に衝突する) 何をする? しっかりせえ! 何をあわを食っているんだ! しっかりせえ!

部長 閣下、た、大変です!

知事 大変だと! 馬鹿! 何を騒ぐんだ。(部長が知事に耳打ちをする) なにっ!! 嘘をついてはいかん!

部長 嘘ではありません。確報です。嘘ではありません。

知事 馬鹿な事を! 内閣が倒れたっ? なに、そしてわが輩が休職! 冗談を言うな!

部長 私も辞職です。嘘ではありません。金解禁に依る財界恐慌の引責辞職です。嘘だと思いになるなら、そこにある電報を読んで下さい。

(知事がガタガタ顫えながらそれを読む)

知事 ああああ。眼がよく見えない! 眼鏡を持って来てくれ。眼鏡だ!

部長 閣下の胸に下がっています。

知事 馬鹿っ! なぜもっと早く知らさない。ああ、ああ、そうか、そうだったのか。(倒れそうになる) 首だ、わが輩までが首だ! どうしたらいいんだ?

耕一 ハッハッハッ! ハッ!

知事 わが輩を辞職させたのは誰だ？ 誰だ？ わが輩は、わが輩はこれでも、十九年間地方

長官の……。ああ、馬鹿っ！ 何をボンヤリしている！

耕一 ハッハッハッ。首を切ったのは誰だ？ 誰かが誰かの首を切るだ。その誰かの首を又誰

かが切る。又誰かが切るだ。又切るだ。切る、切る、切る。そして一番しまいには誰が誰の首を切るだ？ 誰が誰の首を切るだんべ？ ハッハッハッハッ。

教員 本当だ！ 本当だ！ お前の言う事は本当だ！

耕一 ハッハッハッハッハッハッハッハッ……

(失神してしまっている校長と知事を残した後の人達は、教員は尊敬を交えた眼で耕一を仰ぎ見、主任はしぶかしげに見上げ、部長と県視学と郡視学は茫然として見詰める。耕兵衛のみ怒った様な眼つきで壇から耕一を引き下そうとする)

耕兵衛 この馬鹿野郎！ こんな大変なことになったのは、みんな貴様のためだぞ！（耕一を撲る）

耕一 ハッハッハッハッハッハッ！

(耕一の笑声の中に幕)

底本

三好十郎の仕事 別巻

著者…三好十郎 著

出版者 学芸書林

出版年月日 1968年

—一九二七・五・一六—